金大中氏への死刑判決弾劾

赤ヘル諸君の「バリスト」の破産をのりこえ更なる金大中闘争の高揚を！

1/24労学200の隊列で堀田ハガネから韓国領事館へデモを実現

一月二三日午後二時、韓国大法院は金大中氏に死刑判決を下した。同じ時、全斗煥政権は腐蝕で無期懲役に減刑した。筋書き通りに行なわれた金大中氏らの裁判。

全斗煥は金大中氏を殺せなかった。しかし全にとって後退を意味するものではない。殺すことが目的ではなかったのである。命を助けて、政治的生命を奪うこと、これが全の目的としたものである。

全斗煥軍事ボナパルティスト権力は25日に非常戒厳令を解除と、大統領選を公示するなど、ブルジョア的共和制への移行を開始しはじめた。他方、全斗煥は2月2日に訪米と、就任してまもないレーガンと会談し、その後には訪日をも日程にあげている。新たな韓国について日米権力者と会談するのに全斗煥は並々ならぬ決意をもったものである。23日の茶番劇は、全斗煥政権の新たな強権的人民支配のオ一歩であったのだ。

他方、米帝・レーガン政権は「減刑指置を歓迎するとともに、これが米韓関係の随化に積極的に貢献するよう」と言っている。「今回の決定はアメリカの働きかけとは無関係だ」と付け加えながら、レーガンは話をあげて裁判をほめたたえ、延期されていた米韓安保協議の早期再開を呼びかけている。新レーガン政権は、対韓政策の成功的なオ一歩をふみだしたのだ。

また日帝・鈴木政権を「金大中氏の身柄についての憂慮という事態が回避され安心した」の声で「日韓関係を友好的な元の姿に取り戻したい」と語っている。そして凍結されていた百九十億円の55年度対韓円借款を解除し、日韓定期閣僚会議の開催に向けて動きはじめている。日帝・鈴木政権は、全政権に対する政治的・経済的・軍事的テコ入れを更に強化しようとしているのである。

23日の金大中氏に対する判決は、韓国人民に新たな屈従を強いるオ一歩なのだ。助命嘆願運動で勝ちとった社共は、「政治的目的の「回復」を求めはじめた。政治的目的は新たに強権的支配体制のオ一歩を踏みだした全斗煥政権に幻想を与えるものでしかない。それは、社共の対応をのりこえながら、金大中氏無期懲役減刑ノ韓国人民への強権的支配を許すなノをスローガンにかかげて斗ってゆかねばならない。既にそれは、金大中氏死刑判決弾劾ノ堀田ハガネによる韓国人への抑圧ノ全面的統一行動をかちとってきた。金大中闘争の更なる高場をかちとろう！

二度目のバリストの破産は犯罪的

判決日の23日と翌24日、ノンセクト系同学会中執・緊急行動委諸君は再度バリストをうった。しかし、C生はクラス討議を行なうこともなく、バリストをさほど反にとめるでもなく、早々にひきあげてしまった。バリケード」の中では赤ヘル諸君が動いているだけだった。二のバリストは一体何だったのか。12・6バリストの破産を拡大再生産したにすぎない。一度目はある程度反応したC生も、二度目はバリストに慣れとてクールに通りすぎてしまったのだ。一方赤ヘル諸君はクラス討議を組織することさえ十分に追求となかったのである。議論をつぶすことを目的とするバリストをうって、どうしてC生を金大中闘争に組織化することができようか。バリストを担う主体ー金大中氏の死刑を阻止していこうとする主体をどのように作りだしていくのかという理論的追求がなされない限り、バリストは権力にとって痛くもかゆくもない「叛

学生会議

連絡は 06(771)1364 まで

乱」にすぎず、C生に一時的な衝撃を与えるのみである。だが、ホヘル諸君はバリストをうったことで、すなわち、危機的状況にあって自ら行動し、またブルジョア教育秩序を破壊したとして満足しているのかもしれない。しかし、それは金大中氏死刑阻止における役をこなければならないという意識をもつ自己を満足させただけではなかったのか。無操感につき動かされて行動したことを美化したり、ブルジョア教育秩序を破壊したことを責任付与としたとしても、バリスト闘争形態を採用したことそれ自体が、運動の停滞をC生にインパクトを与えて立ちあがらせ運動を作っていこうとするものであり、この間のホヘル諸君の運動づくりの皆無な破産を意味するそのなのだ。

ホヘル諸君の方針は混乱している!

ホヘル諸君は一月闘議以降、昨秋にひき続き「金大中氏死刑阻止ノ韓国民主化闘争連帯!」をスローガンにかかげてきた。そしてホヘル諸君は再度のバリストをはじめ、1.29C代大、3.1対外務省抗議行動を提起してきた。他方、緊急行動委諸君は連続闘争をを行なっている。

ホヘル諸君は、1・29C代大を運動の中心にしている。しかし、12・18C代大からどれほどたっていない1・29に何故再びC代大を提起したのであろうか。「日帝の侵略戦争準備の様々な策動を阻止する自己会運動を更に発展させていく必要がある」(同学会ビラ)とホヘル諸君は主張している。この主張では、自己会運動を発展させることが日帝との闘いであり自己会運動の中で金大中闘争をどのように位置づけるのかが問題だとされている。

9月以降、ホヘル諸君は金大中闘争を闘ってきた。しかし、秋には「日帝本国の人民として」「日帝による様々な形での全斗煥への政治的経済的テコ入れを、日米韓反革命軍事一体化を粉砕する闘い」(10・21全学部学生会への招請状)を闘わなければならない、と主張していた。日韓闘僚会議を粉砕すること、あるいは、日米安保条約、米韓相互防衛条約を粉砕することが強調されていたのであった。

他方、ホヘル諸君の中にあって同学会中執諸君は方針を異にする部分、すなわち緊急行動を諸君が存在する。

「〝韓国民衆と連帯する〟ということは、まず、今、韓国民衆を侵略しているわたしたち自身が来っている姿勢を拒否していかなるくらてを求めるのかということをを考えることから始まる」(緊急行動委ビラ)という主張は、いかなるくらてを求めるかが日帝の侵略と闘うことだということである。

緊急行動委の主張は、「新たな人民の価値感に貫ぬかれた社会を解放する革命」というプロ青同の主張となんと似ていることか。日帝の侵略反革命の諸策動とどう対決するかという同学会中執諸君の考え方とは明らかに異なるその である。「日帝の侵略と対決する」ことを同学会中執諸君、プロ青同系諸君は共に言っているにもかかわらず、いかに対決するのかという方針は全く違うのだ。しかし、この方針上の対立は表面化することもなく、大衆的な理論闘争も行なわれていない。ホヘル諸君が理論的追求をしていないからである。

同学会中執諸君の方針上の変化は何を意味するのか?

12月18日、C代大が前進された支給工は関敢とした。論議にも熱はいらなかった。ホヘル諸君は彼らの運動の破産をつきつけられたのであった。この事態に象徴されるように、ホヘル諸君はクラスからの運動の組織化に完全に失敗した。12・5集会、12・6バリスト上でC生に衝撃を与えクラス討論を組織しようとした。が、それは成功しなかった。「金大中氏のことは考えるべき問題だけど、今は議論をうける時だ。」というC生の右翼的反撥をはっきり返すことができなかったからだ。

そしてホヘル諸君は破産を彼らなりに自覚して、自己会運動としての金大中闘争という方針を出した。この方針で運動の停滞を打破しえただろうか。断じてそうではない。クラス討論の組織化は遅々として進まず、再度のバリストは一部の反撥を生みだし、多くのC生の無気力ぶりを露わにしただけであった。それは、この方針が当にいきづまりでしかなく、12

(次頁へ続く)

自己労働者、学生の闘いの武器
革共同革マル派機関紙
『解放』を読もう
6515号 対ポーランドの冬季方針
8150号 春闘方針
650号 金大中闘争方針
セクト社会に対する(鳥丸・弘川)

・ほぼ代大の破産を規定する方針の理論的誤診が切用される
ことなく温存されたままだったからである。
12.18以降、赤ヘルは方針をなしくずし的に変化させた。
しかし、その方針の前提となる情勢分析は以前のままである。
赤ヘルは、帝国主義と被抑圧民族の反帝民族解放斗争というシェーマで情勢を分析する。しかし、このシェーマからでは今日の世界を把握することは決してできない。資源ナショナリズムにもとづいたOPEC産油諸国の石油攻勢」、スターリニスト官僚(親ソ派のホー・チ・ミンと親中派のポル・ポトらン)に指導された「インドシナ解放」、ホメイニによるイスラム・ラディカリズムとしての「イラン革命」、実体もイデオロギーも異なるこれらすべてを反帝民族解放斗争としてまとめてしまうからである。赤ヘルの情勢分析なるものは全く観念的であり、また現実からなんと〝超然と〟しているこ
とか。
同党パンフ「70代大のために」(1月)ペー/・29「70代大討議資料」あるいはゼラにみられる今日の赤ヘルの情勢分析は、昨年の「10.12文学部学大討議資料」の情勢分析と不敷きにしたものである。それは10月以降、赤ヘルが理論的追求を放棄してきたことを示している。のみならず「10.12学大討議資料」では、「中・ソの動向」という項が存在していた。自称社会主義国(実はスターリニスト国家)に対決しようとする姿勢がみられた。その内容たるやお粗末なものだったとはいえ、赤ヘルにとって中ソを問題にすること自体画期的なことであった。ところが、12月の同党大会パンフ以降、中ソの動向は削りおとされてしまった。中ソを視野にいれて一体どのように世界情勢を分析しようというのか?このような赤ヘルの情勢分析ならざる情勢分析が生みだされるのは、赤ヘルな理論的追求を軽視しているからだけでなく、そもそも赤ヘルが中ソに対決しうる理論的武器をもっていないからなのである。

被抑圧民族連合主義では、階級的連帯はできない!

次に、運動の優位をもたらし、それを打開できなかった赤ヘルの方針をみていくことにしよう。赤ヘルは何よりもまず「韓国民主化斗争連帯」という。赤ヘルのいう連帯とは何か?日帝が韓国民主化斗争圧殺の張本人である以上、韓国人民と日本人民は共に日帝に対して斗わなければならない。そして日本人民は被圧民族であるから、連帯の立場を明確にしなければならないと付け加える。
「総評ー島塚は一時『韓国製品不買運動』を提唱した!!
彼がこの案を引っこめたにしても、その間に充分すぎるほど韓国での御用反日運動を台頭させるのに一役買った事実は免罪されない。」と赤ヘルは言う。「韓国製品不買運動」は排外主義をあおるもので、連帯を分断するものだと断罪するのである。そして排外主義と対決することは連帯に不可欠だというのである。
では、御用反日運動とは何なのか?韓国労働者、人民は、即自的にではあるが全斗煥政権に対して斗っている。そして、その斗いの中で同時に反日感情をもっている。日本企業の進出と搾取という厳然たる物的基礎が存在するからである。ところで全斗煥は、韓国人民の即自的感情を利用して反日キャンペーンをふりまいている。全は社会の矛盾を外に向けさせようとしているのだ。御用反日運動はこうして作られ、韓国人民の全政権に対する斗いは歪められんとしている。
反日キャンペーンにまきこまれていく韓国人民のありのままの現実をそのように打開していくのか。これが問題ではないのか!日帝の韓国侵略を歴史的に確認して抑圧民族としての自己否定をすればよいのか?全斗煥は、過去の日本民族の侵略を語ることによって反日感情をあおりたてているのだ。赤ヘルは全斗煥と同じことを言っているのではないのか。このような赤ヘルの主張は全斗煥の反日運動に絡めとられてしまうだろう。韓国人民の斗いが歪められんとしている現実をつき破っていくことが必要なのである。
他方、労働者、学生の全に対する斗いはブルジョア民主主義者によって歪められようとしている。我々はそれをもあばき出し、韓国人民に斗いの方向性をさし示しながら斗っていかねばならない。我々に向われているのはまさに全斗煥の圧殺と御用反日運動へのからめとりとブルジョア民主主義的歪曲に抗して斗う労働者と連帯して斗っていくことである。赤ヘルにはこうしたことが欠如している。そしてその根拠は、赤ヘルが抑圧民族ー被抑圧民族の図式で対立を考えることである。韓国におけるブルジョアジーもプロレタリアートもすべて被抑圧民族とすることで韓国のブルジョアジーとプロレタリアートの対立を隠蔽することになってしまうのだ。

政治的自由を基準にした運動をのりこえて斗おう!

赤ヘルはまた「公刑を阻止し、金大中氏の自由をかちとってやかねばならない」と主張する。「金大中氏の自由」とは、全政権下での政治的自由のことなのだろうか?また次のように言っている。「金大中氏は韓国の民主化と朝鮮南北統一にとって

有用な人物であり、日米帝にとって危険であるから抹殺されようとしていること。ここでは明らかに政治的自由＝ブルジョア民主主義的自由をかちとらなければならないと言っている。そしてこれは彼らなき排外主義とレッテルを貼っている社会党、共産党と全く同じ主張なのである。

しかし、韓国労働者人民が苦闘しているのは政治的自由がないからであろうか。否！韓国が深刻な経済危機にあり、「反共最前線」として位置づけられているからである。全斗煥は経済危機と、「反共の砦」としての役割をそのままにして改憲や大統領選挙を行なうなどして共和制に移行しようとしている。政治的自由をかちとろうなどというのは、全斗煥のいう黒い野望を全く見抜くことができず、それどころか全斗煥政権に幻想をもち、労働者人民の武装解除を促すものなのである。われわれは政治的自由をも基本とした既成左翼社会の、そして木ヘルの運動をものりこえて斗っていかなければならない。

「真に有効な手は敵の狙いの正しい分析とそれを粉砕し得る正しい路線、方針を不可欠とする」（ヘーゲル『大論理学』序文）とは、よく言ったものである！

日本型ネオ・ファシズムに反対しよう！

韓国人民に対する全斗煥政権の攻撃に見逃すことのない木ヘルはまた、この日本における労働者人民にかけられている本質的に同じ攻撃に無関心である。鈴木・喜一政権は、憲法改悪、労働組合の「産業報国会」化などを通じてネオ・ファシズム統治形態の構築をめざしている。そして、戦争に反対し、ネオ・ファシズムに反対する労働者、学生に対しては、謀略殺人襲撃さえかけているのだ。9・24動労教宣部長小谷氏、26全金大阪書記吉岡氏襲撃事件。10・3東工大学友会委員長ら5学生虐殺事件など。これらの事件に対し、多くの知識人、労組指導者は、ファシスト的行為であることを見抜き、昨年11月15日「あいつぐ虐殺、襲撃におそれず声明する」という声明文を発表した。この声明に対し賛同の意を示す人が続々とあらわれている。

一方、木ヘルはこれらの事件に対して「肉ばん」ときめてかかり、何ら反対の態度をみせていない。多くの知識人たちが、ファシズムを直感して立ちあがっているのに、なんと感性のマヒした徒輩であろうか。マスコミの流布する「肉ばん」をうのみにして沈黙を守るとしたら、それはまさに権力の思うツボではないのか？「侵略戦争準備反対」「日帝の攻撃を一つ一つ粉砕していく」というならば、これらの事件を断乎として弾劾していくべきではないのか？

不屈に斗う韓国人民と階級的に連帯し斗おう！

全斗煥は、金大中氏の政治的生命の抹殺を一つのステップとして、韓国労働者、人民に対して、更なる強権的支配を貫徹しようとしている。われわれはこのような全斗煥の凶悪な策動を許してはならない。金大中氏を「共産主義者」とまつりあげ、抹殺することで、人民の斗いを押し殺すだけでなく、また「北」の脅威を煽り立てながら軍備増強を着々とすすめ、「反共の砦」として確立、強化し、軍事官僚体制をうちかためていこうとしているのだ。我々は金大中氏らに対する判決を弾劾し、全斗煥による新たな強権的支配の本質をあばきだしながら斗っていかねばならない。

そしてまた、全斗煥政権を支えているのが米帝・レーガン政権なのだ。ソ連のアフガニスタン侵略を契機として、世界支配戦略を転換させてきた米帝権力者は、対韓政策をも転換させたのだ。在韓米軍撤退を棚上げにし、韓国を「反共の砦」としてあくまでも維持・強化していこうとしており、この米帝に協力・加担するのが日帝なのである。日帝、米帝の諸策動に反対し、ソ連の核軍事力の増強反対！米帝のアジア核軍事体制強化反対！をかかげた反戦の斗いを全大中斗争と同時に進めていかなければならない。

今日、中国北京官僚は、新たな対韓政策を展開する米帝権力者と政治的結託のみならず、軍事的にも協力しようとしている。そしてソ連クレムリン官僚は、朝鮮半島、アジアの米・中結託に対抗し太平洋艦隊の増強をつづけている。しかも北朝鮮スターリニストも「南北朝鮮の自主的平和的統一」を口にする一方で全斗煥に対抗して軍備増強をおこなっているのだ。

南北に分断された朝鮮人民の悲劇とその本質（帝とスタの分割支配）を明らかにしつつ南北朝鮮の革命的プロレタリア的統一の展望を示していく必要があるのだ。

また日帝が、全斗煥に加担するのは、韓国を「反共防壁」としてのみならず「兵器工場」として位置づけているからだ。スタグフレーションに喘ぐ日本経済はブルジョアジーが、韓国を「兵器工場化」することで経済の軍事化をすすめようとしている。堀田ハガネの武器輸出の暴露を、更なる武器輸出の糾弾に他ならない。我々は堀田ハガネの武器輸出を弾劾し、いっさいの兵器生産、輸出に反対し、経済の軍事化阻止、韓国への新植民地主義的侵略反対のヨリとしても斗っていかねばならない。共にたたかわん！